

Ⅷ 高齢広葉樹林の萌芽更新技術の確立

(実施期間：平成 28 年度～令和 2 年度 予算区分：県単 担当：西信介)

1 目的

里山林の放置による里山広葉樹林の高齢・大径化が進行しており、特にナラ類はナラ枯れ被害が増加する要因ともなっている。ナラ類等の広葉樹はシイタケ原木、床材、木炭等に利用されるほか、近年では木質バイオマス燃料としても注目が高い。

里山のナラ類等については、萌芽能力が高い 15～25 年生程度で伐採・萌芽更新させていたが、近年の高齢化した広葉樹林伐採跡地では、ヤブ化・ササ山化した山林もみられ、高齢・大径化に伴う萌芽能力の低下や不適切な伐採が原因と指摘する声があり、高齢広葉樹林の更新方法の確立が急務となっている。

2 実施概要

13～90 年生のコナラの伐採地で、伐採時期、樹齢、伐根の直径、伐採高、萌芽枝の発生位置、本数、樹高等の状況を調査した。その結果、90 年生のコナラでも萌芽することを確認できたが、伐採時期により萌芽率が異なり、夏期に伐採すると萌芽率は低く、冬期に伐採した方が、萌芽率は高かった (図)。秋期は萌芽率に差があり、紅葉前の 9～10 月に伐採した場合は萌芽率が低く、落葉が始まった後の 10～11 月に伐採した方が、萌芽率は高かった (図)。

継続調査している冬期に伐採した 80 年生のコナラ林では、4 年で 3 m を超える萌芽もあり、適期に伐採すれば萌芽更新は可能と思われた。

3 結果の図表と研究の様子

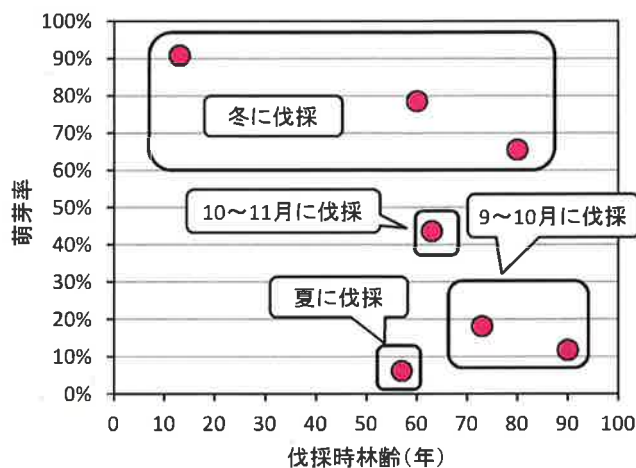


図 林齢と萌芽率の関係(コナラ)



写真 伐採から4年で3mを超えた80年生コナラからの萌芽